町史の窓（55）

『古代人の寿命』

町史編集委員
今　津　勝　紀
（岡山大学文学部助教授）

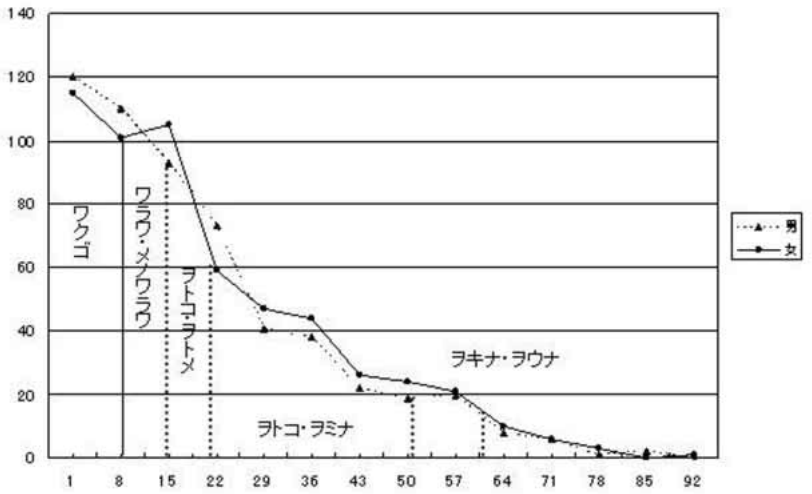
前回は、古代の村の人口規模についてお話しましたが、今回は、その村の人口構成から当時の人々の生活を考えてみたいと思います。大宝二（七〇二）年の御野国加毛郡半布里戸籍は、三つの村をまとめたもので、一一一九人の名前と性別・年齢が戸というまとまりごとに書かれています。古代の戸は、男性を戸主として戸主のキョウダイやイトコを含む、いくつかの世帯の複合体でした。現在では戸と世帯は、ほぼ同一ですが、古代の場合、戸の中にいくつかの夫婦（世帯）を含んでいます。

まず、半布里の人口構成は典型的なピラミッド型になります。日本古代の年齢区分は、Ⅰワクゴ－Ⅱワラワ・メノワラワ－Ⅲヲトコ・ヲトメ－Ⅳヲトコ・ヲミナ－Ⅴヲキナ・ヲウナという呼称の変化が認められます。数えの八歳まではワクゴとよばれ、この段階ではまだ男や女といった性が分化していない状態にありました。八歳以降になって、女（メ）と男（ヲ）に区分されるようになり、童男（ワラワ）・童女（メノワラワ）と呼ばれるようになります。そして、こうしたワラワが、生殖可能な状態になるとヲトコ・ヲトメとなり、結婚したヲトメがヲミナとよばれます。古代の場合、法律上、男性は十五歳、女性は十三歳から結婚が可能です。このような年齢による区分は、髪形などにも表現されるので、一見してもわかるものでした。

ところで、半布里の人口構成をもとに考えてみると、古代社会は次のような特徴をもちました。まず、半布里ではワクゴとワラワの世代で人口のほぼ半分近くを占めています。このことは、村には大勢の子どもがいたこと、それに応じて大勢の妊婦が存在したことを示しています。村の中では、裸ン坊に近い格好の子どもたちが、はしゃぎまわっていたことでしょう。また、童男・童女がオトナの補助労働に従事している様子が万葉集の歌などに詠みこまれています。水汲み・洗濯・牛飼・菜摘・薪拾いと大活躍で、この世代は貴重な村の労働力でもありました。もうひとつ言うと、この人口構成は、年齢を重ねるに従って、急激に人口が減少しています。つまり、ヲキナ・ヲウナといったお爺さん・お婆さんになれる可能性は高くありませんでした。村に大勢いる子どもたちの両親が健在であるとは限りません。キョウダイやイトコ、そして村のみんなの助けが重要な意味をもちました。古代の人々にとり、生と死はきわめて身近な存在であり、多産とともに多死を特徴とする社会であったといえます。

ちなみに、こうした特徴を具体的に把握してみたいのですが、当時の乳幼児死亡率を正確に把握することは困難であり、現在のような精度で出生率や死亡率、平均余命を算出することはできません。そのため、あくまでも大雑把な試算にすぎないのですが、半布里のデータをもとに推計して現在と比較してみると、当時は、出生率が現在の三倍以上、死亡率は現在の数値より二桁違いの高率になると予測されます。出生時の平均余命は大体三〇歳前後であり、大部分は四〇代で死亡し、五歳以下の乳幼児死亡率が五〇％程度であった可能性も考えられます。

現在の出生時の平均余命は、女性で八五歳を超えるにいたりました（二〇〇二年）が、女性の出生時の平均余命がはじめて六〇歳をこえたのは、一九五〇年のことです。それ以前はもちろんそんなに高くはありません。比較的研究が進んでいる江戸時代の場合、平均余命は社会階層や地域により異なるのですが、それでも三〇歳から四〇歳程度であり、奈良時代の平均余命が三〇歳前後というのは、あながち的外れな予測とはいえないでしょう。ちなみに、水稲耕作が開始される以前の縄文時代の人骨を分析した古病理学の立場からは、縄文時代の出生時平均余命は十五歳程度であったとも推計されています。こうなると生きていることすら稀であり、ましてや子どもを生み育てるなどということは、よほどの幸運にめぐまれないと不可能ということになります。もちろん、縄文時代の人骨が現在まで残ることが稀であり、限られた資料からの大胆な推測にならざるを得ないのですが、現代を遡るほど、人類の生存条件には過酷なものがあったと考えられます。



半布里の人口構成